

# 日本型インターンシップのゆくえ

■  
児美川孝一郎

日本ではインターンシップの定義として、「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」が定着しつつある。漫然と読むとスルーしてしまうかもしれないが、なぜ学生の「専攻」と「将来のキャリア」は、わざわざ併記されるのか。海外に目を転じれば、学生の専攻と将来のキャリアが結びつくのは当たり前のことではないのか。そうであれば、定義のうちの「将来のキャリア」は要らない。しかし、日本型インターンシップの場合には、この漠たる表現が必須である。なぜなら、学生たち（少なくとも文系学部の学生）の大半は、在学中の専攻とはおよそ無関係な就業体験に赴くからである。それをも「インターンシップ」と称するためには、無理にでも「将来のキャリア」を持ち出しておく必要があるのだろう。

では、学生たちはインターンシップにおいて「就業体験」をしているのか。彼／彼女らが取り組むのは、多くの場合、長くても1週間程度の体験であり、その内容はセミナー、見学・体験、社員との交流、学生同士でのグループワーク、プレゼン等であって、実際に業務を体験することではなかったりする。そうだとすれば、そもそも先の定義の足元は危ういのではないか。

冷静に考えれば、在学中の専攻とすら関連しないインターンシップに行く学生は、当然のことながら、実務に従事できるような知識もスキルも持ち合わせていない。そして、日本型の就活を前提に考える彼／彼女らは、長期インターンシップを通じて、実務に必要な知識やスキルを獲得しようといった構えも持たない。企業は、こうした学生を相手にするのだから、実務を経験させるのとは異なるプログラムを考え、工夫するしかない。もちろん、企業側がなぜそんな面倒なことをするのかといえば、インターンシップを、広い意味での

新卒の採用活動と結びつけているからである。将来のミスマッチを防ぐといった目的とともに、優秀な学生との接触を少しでも早く実現し、候補者のプールを形成しておきたい、等々。おそらくこうした発想の延長上に、学生への接触をもっとも効率的に最大化しようとしたのが、（こんな概念がはたして日本以外の国で通用するのかという）「1 day インターンシップ」だったのであろう。

かくして、日本型インターンシップ概念のガラパゴス的な「進化」が遂げられてきたが、はたしてそれでよいのか。経団連と大学側の団体でつくる「採用と大学教育の未来に関する産学協議会」は、この間の協議において、実務を伴わない「1 day インターンシップ」をインターンシップと呼ぶことをやめるよう提言し、「キャリア教育としての低学年向けインターンシップ」と実務を伴う「就職・採用選考を意識した高学年向けインターンシップ」（傍点筆者）を区別することを求めた。あまりに特殊な日本型インターンシップを少しでも諸外国のスタンダードへと近づけようとする努力に見えるが、しかし、後者においても「汎用的能力・専門活用型インターンシップ」なる、これまた理解が難しい類型が提起されてもいる。日本型雇用をどこまで前提とするのか／しないのかの判断も含めて、苦しいところなのであろう。

インターンシップについての研究は、この間、量的にも質的にもめざましく進展し、成果が蓄積されてきた。頼もしい状況であるが、同時に、これまで研究対象とされてきた日本型インターンシップは、そもそもどのような社会的基盤に位置づいてきたのか、その基盤を揺るがす磁場は今後はどう変動していくのかについて、メタ次元での視点を併せ持つておくことが必要になってきたのではなかろうか。

（こみかわ・こういちろう 法政大学キャリアデザイン学部教授）